きすふれ！

きす☆ふれ

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=20613304

モ腐サイコ100, 霊幻総受け, 本番無し, エク霊, モブ霊

無知シチュ師匠の総受けです。攻めたちが師匠を色々そそのかします。今回は本番無し、エク霊メイン、モブ霊要素有りです。
良ければお付き合いください🌸

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

Table of Contents

きす☆ふれ

「なんだよ、俺を仲間はずれにしやがって！も〜、ちゅーしちゃうぞ〜！」
酔っ払った霊幻の声に、うんざりした顔を茂夫、エクボ、芹沢、トメは浮かべた。
「霊幻さん、またキス魔になってるよ」
言うだけであるが、ことあるごとに唇を突き出してくる霊幻は鬱陶しいことこの上無い。
「お前さん、いい加減にしろよ。立派にセクハラだからな、それ」
「え〜？それってどれだよ〜？クスクス、なぁ、ちゅーしよ〜ぜ、えくぼ〜」
「……なら、お望み通り、してやるよ」
「「「「え」」」」
霊幻の左隣に座ったエクボが、右手でがっと霊幻のアゴを掴み、左手を回して後頭部を掴む。
「んんんん〜〜〜〜ッ！」
敏感な唇を擦り合わせ、舐められ、深く舌に侵入されて、霊幻の足がジタバタと暴れた。
あまりのことに茂夫、芹沢、トメは呆然と２人のキスシーンを見守ってしまう。
「ん……んぁ、ぁ……っ」
鼻にかかった声が漏れ、くちゅ、と赤い肉厚なエクボの舌が霊幻の口を出入りしているのがちらちら覗く。
「ん……っ！」
「っ、ちょっ、エクボ！やりすぎ！」
ひく、と隠し切れない刺激に霊幻の肩が揺れる。ハッとした茂夫が立ち上がって２人を引き離した。
「師匠、飲み過ぎです！エクボも悪ふざけしすぎ！僕、送って帰ります！」
「俺も手伝うよ」
芹沢と茂夫がお金を置いて、霊幻をガードするように左右から挟ん

で支える。
「霊幻さん、これで懲りるかしらね」
「さあな」
流石に女性に言うのはまずいと理解しているのか、唯一ちゅーを迫られたことが無いトメが、ぽつりとこぼすのに、エクボはビールをすすりながら肩をすくめた。

※

茂夫の頭の中を、この間の霊幻のキスシーンが何度もよぎる。
もやもやする。
こんなことなら、僕がキスを迫られた時に、先にしておけば良かった。
……そんな事まで茂夫は考えてしまっていた。
大学から相談所への道のりが、やたら長い。エクボと霊幻を２人きりにしていることに、妙な焦りを感じた。茂夫はノースフェイスのリュックを背負い直し、歩調を速めた。
「……」
いつもは挨拶して入るドアを、そっと開ける。

給湯室から、微かな喘ぎ声と、粘着質な音が響いていた。

※

「なあ、本当にみんな、こんなことしてるのか？」
エクボが霊幻の身体をシンクに押し付けると、霊幻が不安そうにエクボを見上げてくる。
「そうだぜ。キスフレって言ってな、今時は仲のいい友達ならみんなキスぐらいしてるんだよ。男女問わずな。……まあ、友達のいない霊幻先生は知らなかっただろうが」
む、と霊幻が口を尖らせる。
「し、知ってたけど？」
「そうか。な、霊幻。俺様はお前のキスフレなんだよな？だったら

ちゅーしていいよな？」
「そ、そうだな。……今か？」
「いいだろ？客が来るまでだ」
「ん……」
友達、という警戒心を溶かす甘美な響き。エクボの体温の心地良さ。それに負けて霊幻はエクボの首に手を回す。
「ん、んっ、ん……んぁっ！」
くちゅくちゅと頭に響く音に霊幻は夢中になる。差し出した舌同士を擦り合わせるとぞくぞくした。
気持ちいい。もっと。
口を開けてエクボの舌を求める霊幻に、悪霊はしめしめと目を細めた。
「えっ！？キスだけだろ！？」
プチプチとシャツのボタンを外し始めたエクボに霊幻は抵抗する。
「キスするだけだって」
ちゅ、ちゅ、とエクボは白い腹に唇を這わせる。
「ひ、ひひゃ、くすぐった……、っふ」
クスクスと笑う霊幻が、乳首に口付けられてギクリと身体を強張らせる。
「そ、こは、っ」
「どうした？キスしてるだけだぜ」
「な、んか、ヤバい、って！……勃つっ……！」
ぴちゃ、と口の中で転がされた乳首が卑猥な水音を立てる。
「……やらしーな、霊幻？キスで勃起すんのか？」
「……っ！あぁッ……！」
抗議しようとした霊幻は、ぢゅっと乳首を吸い上げられて喘ぎ声を上げてしまった。

「っ師匠！こんばんは！」

茂夫の声に霊幻は反射的にエクボをつき飛ばす。
さきにいけ、と口パクでエクボに指示する。霊幻は乱れた衣服を整えてから行った。

「お、おう、モブ。早かったな」
「……いつも通りですけど」
じとり、と茂夫は憑依したエクボを睨む。
「エクボ、後で話があるから」
「あ、エクボ、その後でいいから、２人で飲みに行かねえか？
ちょっと相談したいことあって」
がんっ、と茂夫はショックを受ける。
「ぼ、僕は行っちゃ駄目なんですか？」
「いや、ちょっと子供に話すことじゃないっていうか……！悪いな、また今度誘うから」
「……分かりました……」

※

「エクボ、どういうつもり？師匠をもて遊ぶなんて」
「人聞きが悪いぜ、シゲオ。俺たちゃキスフレになったんだ。同意の上だ」
終業後の施術室で、こそこそと話す。はく、と茂夫は空気を食んだ。
にや、とエクボが笑う。
「シゲオ、俺様なぁ、霊幻が好きなんだよ。愛してるんだ。だからよ、ほうっておいてくれねえか？」
「え、っ」
この最強の超能力者に何が１番効果的か。
長年の付き合いで、悪霊は良く理解していた。
正論と純愛で殴れば、抵抗してこない。
「じゃあ、そういう事で」
「……まだ、付き合ってるんじゃないんだよね？」
が、大人になりかけの瞳が、反撃の光を灯す。
「……そうだな」
「僕も師匠が好きだ。……と思う」
「何だそりゃ」
「だから、いたずらに師匠にキスして欲しくない」

「馬鹿言え！同意だって言ってるだろ！……キスフレなんだよ、俺たちゃ」
言い捨てて立ち去るエクボに、茂夫は手を握りしめる。
「きすふれ……」
覚悟を決めて、前を見つめた。

※

「で？なんだよ、相談って」
ビールでナッツをつまみながら、エクボが雑談をしていた霊幻に水を向ける。
「……キスフレのエクボになら、訊いてもいいかな、って思って」
「ああ」
「俺さ、こういう話、しねえもんだからさ、何て言ったらいいか……」
「うん」
「何か、なんとなく、友達としてこなかったんだよな、こういう話」
「だから何だよ！」
痺れを切らしたエクボが少しイライラした声を出す。
霊幻は顔を真っ赤にして、俯いて。

「あのさ、射精って……どうやってすんの？」

「は？」

悪霊の虚をついた。

続